



畫本西遊全傳 四編 七



へ遠1  
2500  
40-37



門へ遠く  
2500  
40-37

繪本西遊記四編卷之七

油

四僧宴樂御花園

一怪空懷情慾喜

引入斯と傳奏々々此の國土急ぎ三個を朝前小到りあり悟空  
話表行者が筆三個己小午門外に到り黄門官出来しそ導  
引三個階下に立定て敢て拜と為む國王三個が異形なる像の  
驚さ心裡小恐怖と做且他們三個が姓名出生と問ふ人小行  
者答て曰く老孫の東勝神劍傲未國花果山石中出生名の  
孫行者悟空と呼聖天大聖の帰正なり二徒弟の猪八戒沙悟  
能是天蓬元帥の轉世なり三徒弟の沙和尚法名悟淨是提  
摩大將の臨凡なり個々昔の妖邪なり當下佛門小敬依し唐僧  
の徒等と有り都て法名法号と受師父と守護しと敬上上妖を





留春亭  
三藏八戒を  
打こす



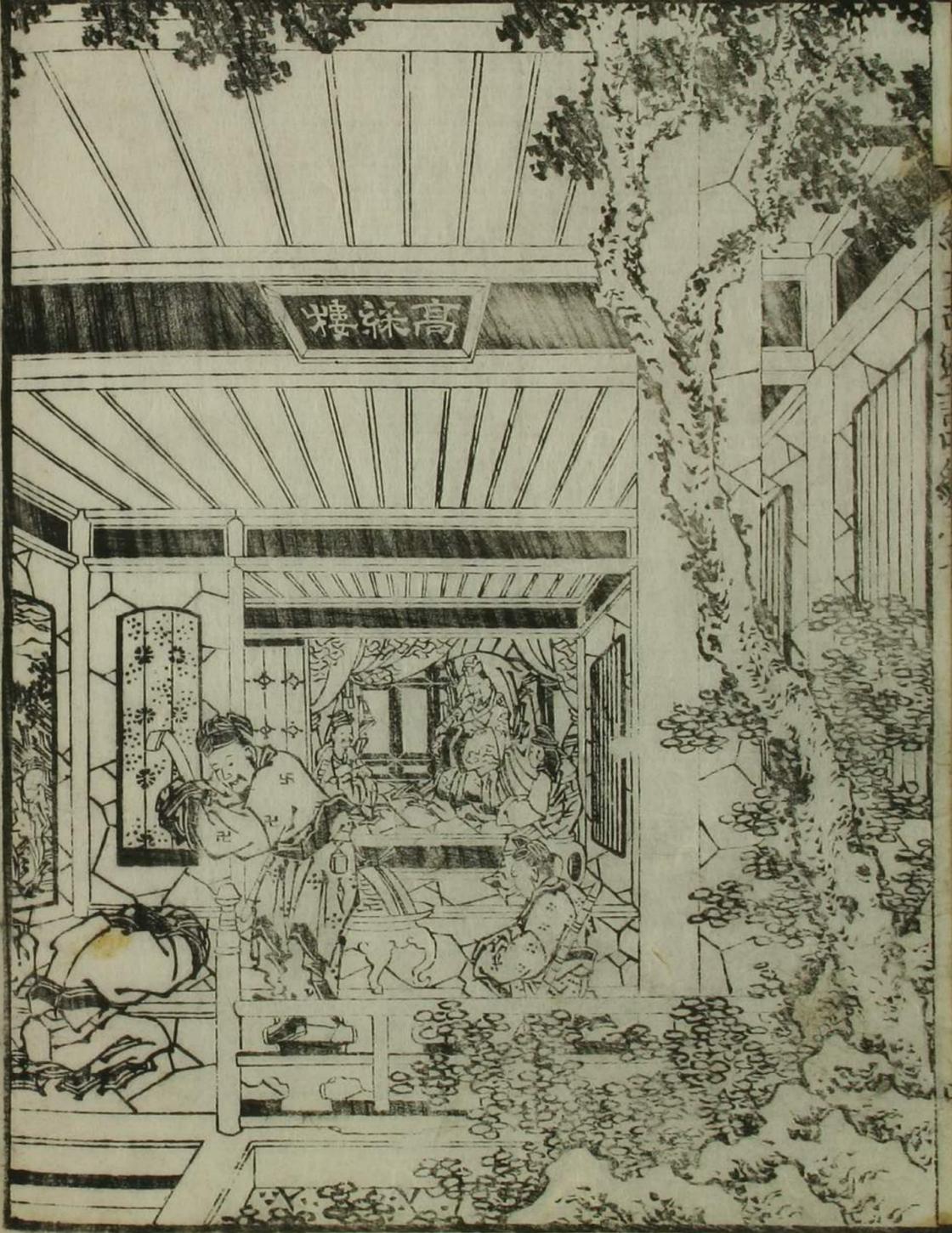
留春亭  
三藏八戒を  
打こす

降し魔と依り今日爰ふ到るる上と述べた國王是と聞て死する  
ハ王子の活佛三藏と招きつるを懼喜或の行者う輩二個が奴相  
るを驚き怖む然るて居る處へ忽ち正堂陰陽官上前出  
て本月十二日壬子誓姻の良辰うと奏聞を國王大の心懼い  
え今日巳初八日然る佳期近きふ在旦駟馬と三位の高徒を  
休息せむべしと當駕官ふ命トあひ師徒四衆と御花園の裡  
ふ於て筵宴を催し万般と管待多う其夜深更ふ入静りて後  
三藏悄悄ふ行者を呼國王今我を招きて駟馬と做んとは我奈  
何なる計策を以て爰と脱出んやと曰へを行者曰く我國王の  
面を看ふ此丁の妖氣あり布金寺の老僧の言を以て想合む  
バ彼公主却て妖怪うんも計難十二日會親の時至らば國王

極て出来りて父母を拜まへ其時我們身邊ふ在て其真儼と  
辨むる他果て真の女人うを師父則ち駟馬とあり一國の榮  
花と請めく三藏大のふ賢て曰く你這猴頭尚我と嘲弄ふまら  
や我們の功業巳ふ七八分お到り今更邪念を敬さんや再は是を  
云ふ我緊箍咒を念へて你の身の居處無けん行者驚き慌忙  
跪き師父日念心へぬふ受らるる必む會親の時ふ至らば我輩  
斎ふ白玉宮の廟へ師父を領て脱出候ん心を安んて十二日  
を待めんとて和めらるふぞ三藏も心を易む懼喜つて遂ふ其夜  
の山女お味々々明日國王亦四衆を朝ふ宣國王と三藏と蓮花  
閣ふ登つて飲食し師徒の座次の便宜うづむとて三箇の徒の  
留春亭ふて宴を給ひ終日の歡樂を做しめぬ天晚ふ及ん

徒弟們師父と尋ねて鎮花閣の一邊ふ来り師父は國王と  
 閣中ふ座して在ると看て八戒醉ふ棄ると今日終日の飽食と  
 しきり夜ふ入て尚睡らざらやと呼れは汝僧突て曰く一死は養  
 生と不知這樣ふ飽食の後息生急ふ睡るべらんや八戒曰く  
 我那ぞ養生不養と餓んや唯飽て睡醒て飽ば那ぞ亦他ふ望  
 めらんや行者他輩が争ひ喰を看て或の師父の驚めらん  
 竟と怖れ且兩個を呼返り亦留春亭ふ入りりる當下三藏  
 少時國王ふ辞し退り留春亭ふ入来りて八戒と呼で叱て曰  
 く你這猷子爰と何處と思ひて嚮の如く周りや若國王の  
 驚ふ觸を大いなる罪ふ偶ん竟を知りやと云らんが八戒曰く苦か  
 らば我既小皇帝と一宗とて他は我輩と驚り我は

家這時心の休め戲遊むんを更に亦何の時と待へらんや師父  
 既ふ駢馬と成ぬひささう尚他を怖れぬふ奈何三藏是と聞  
 て大いふ驚り快く猷子を拿来り我自親二十單杖とむ  
 ち打べりて行者ふ分付八戒を扯倒させ錫杖と振拳て連  
 打ふ打るへを八戒掌と拜て駢馬前々饒りぬくと泪と  
 流して叫ひたり一邊ふ在り陪宴官是と看て衛々ふ三藏と  
 諫勸住め錫杖と扱取り八戒の這り起上り師父國王の  
 駢馬と成ぬひ未だ禮も不為ふ快く白皇帝の代を勧め這  
 般ふ人と刑さるやと口裡ふ獨語りりて行者他ら驚り侮へ你  
 亦乱説して再び打りく竟のうも大家快く睡へりて其夜の  
 留春亭に安寝時たり是より兩三日國王日遊宴と安排て



師徒四個と只管管待不期己ゆ十二日の佳辰お到つと光録守  
大部等の官負會親庭席の準備盡く教正備らるる由美因  
々々國王満心勸喜上日と傳へて駙馬と宣庭席お赴くめん  
と為ゆへ處ゆ忽ち内宮官國王の尊前お来り正宮口ハ公主娘  
娘の請ありと奏し々々國王遂に請お任せて内宮お入直に  
昭陽宮お到り二五皇后六院の妃嬪都て公主お扶持甚と  
團ね錦と聚め々々如きを看國王心裡歡喜お堪はハ公主お對  
ひて曰く賢女今僥侍お聖僧と配偶と做思ふお願置ぬ  
べ今方般己お整備し今鳥正お佳期お當らば快く合登  
宴お赴き親事と成就まをハ公主當下近く上前身と倒し  
て父王と拜しと曰く父王方望の小女が罪と赦し一言の啓儀と

聽ゆへ遠筈日宮官輩が云傳ると聞お唐聖僧お三個の徒  
茅ありて甚穉淨像うると云ハ方望の父王日他輩と城外へ  
送し出し給らば小女驚き怕の憂々安堵て宴お赴き侍らん  
國王の曰く三個の徒茅們像醜惡と類々他輩今御花園  
の裡お在朕己お他們と見事と好まば思ふお今日他が明使  
と換城外へ送し出ハ大雷音寺お赴き然後會親の宴と做  
ん公主是と聞て大りお喜び深く父王の因心と謝は國王より  
亦殿上お還り急ぎ唐僧四衆と宣入ゆハ三藏師徒の御  
花園の裡お在て今日正お十二日良辰るとい管は會親の宴  
と做ららん快く計策と定て脱し出へると個々商議と做居  
る處へ當駕官儀判司来り國王唐僧四衆と請いゆらりと

郁々るふど是と聞て師徒四個一齋小朝ふ入て丹墀の下に立  
 双びたる時國王三個の徒等と呼て曰く朕今関文小老押と  
 用ひて你們三個小通與今より你們を送り出はべ快く靈山  
 小登つて佛と拜し經を求て返つて来せ然を我重く恩賞と與  
 ん騎馬の住て爰小在管む放心莫勿と行者們三個一齋小拜  
 と曰く万望の万歳爺々快く我們を送りぬ國王頷て関文  
 小寶印を居て行者小通與亦黄金十錠と曰金十錠と贈り  
 て路費と為しむ行者輩三個遂小國王小拜辭し身と轉と  
 出んと為と二藏驚き色と失ひ你們実小爰と去やと扯住  
 んと做あんと行者去個眼色を做師父心と安んがと任し  
 我們管は經と取忽ち再び爰小来つと候んと云々は二藏

行者が詞と悟つ唯點頭て在座する行者們三個の遂小殿と辞  
 下りて一齋小朝門を出駅館小返りし行者則ち八戒悟淨  
 小向ひ低言て曰く你們兩個爰小塵と塵待若駒亟小對と  
 るとも唯能程小應と做我と説話為莫さるも我の今より去  
 て師父と保守べと一根の毛を抜て飯小行者の摸様と爰  
 小做駅館に住置真身の蜜蜂見と爰小直小朝中小飛去  
 師父の耳の一邊小住り師父我来り管は放心ぬへへ  
 と云て亦翅と展て唇の瓦上小住り殿中の光景を私小  
 打探居つとる

假合形骸擒玉兒 真陰歸正會靈元  
 却説不爰時内宮官殿上小来りし合番の官女已小鳩鶴宮中

に掛せる由と美園を國王三藏と同伴て後宮小入々を修行  
者亦翅と展て師父小跟ひ後宮小入宮裡と打探見小報  
祭天小僧異香白鼻と撲兩班の孫女宮娥整々と排列  
是れ是れ甚宮仙府と看如く及時有て皇后嬪妃公主と  
圍繞鳩鵲宮中ふ出来つ二藏と迎へ拜我王万歳万  
歳と一齋小唱へる二藏の心裡驚き戦々兢々として魂一向小  
身小添は呆臉呆てぞ在る行者師父の富貴色慾小  
と揺さるるを看て心裡小賞賛亦公主の容貌と打探小  
果而頭上小一髮の妖氣有るふぞ儲へと田心ひ急ぎ師父の  
耳根小赤行悄悄小告て曰く師父公主の果て妖精なり我  
今他と探へ候ん宮に驚きぬると云置て其後公主の

小赤到り勿心本相と現し公主と扯住て曰く你這妖精  
這裡小在て斯の如く栄花を受何の不足有る亦我師  
父と哄き真陽と奪んと為や快く正体と頭をてとととと  
とととと許及の后妃と首とと衆位の官眞是と看て  
胆と亡ひ魂と飛し宮娥孫女の輩東西小迷迷の國王小座  
と立て逃んと為めんと三藏抱き住め君君怕とぬふ言又る  
是我徒才法力を以て妖怪と捉るなりと所びめひくは國  
王愈驚きさる彼妖精の公王の行者が手を振放ち衣服首  
飾と解去て御花園の土地廟の裡小跪入一條の短棍と取  
出し行者と中眼て打て羅る行者同く御花園小追至つて  
鉄棒と両手出り兩個叫ひ言て合て相争ひ候小神通と現

空中の飛身は一時の間戦ひつらば行者則ち棒を空中  
に投揚てんと呼ぶるも忽ち百子の鉄棒とて變りて  
上は落葉るは怪驚き慌忙し身を閃くと一道の清風と  
化し正南に向ひて逃去たり行者雲を縦て是と對行つらば  
忽ち一座の大山に到りし時妖霧亦金光と變り山を下りて  
洞に入り寂然と消失たり行者思ひつらば他若潛し隠れり皇  
宮に還り師父と害せんと爲も計り難くと疑ひ思ひ立地し雲  
を轉りて飛ぬつと皇宮に到りし時國王君臣妃嬪宮女の  
輩始て公主の眞の公主に非ざ妖霧の變りしを悟りて個々怪  
と怖れて在る處へ行者雲を下りて故つと未と鴉鳴宮外に  
立ちしは二藏急ぎ問て曰く假公主の虚実奈何行者曰く

彼公主の実は一個の妖邪にて他一座の山中に逃ぬつと我々も  
追至りしはも跡跡を知り他亦暗く爰に故つとて師父を害  
せん事を怖れ二日帰つと未と國王是を聞し公主既に妖邪  
つらば我々の眞の公主の那に在らんと哭ぬ一は行者曰く我假  
公主と扱つらば眞の公主の自然出まらぬと宮娥如嬪輩  
は日丙宮に還りて久潜下と師父の殿に候つと我師父八戒  
沙僧と宣ぬへ我再び去て妖霧を拿へ候ん當下白皇后妃  
嬪輩都て恐懼の心を忘し個々行者が身近く上前より  
万望の聖僧我眞の公上と扱あつらば永く大因心と忘し侍下  
として幾番由行者と拜し遂に丙宮に退たり國王の二藏と  
導引亦殿上に到りし急ぎ官負に命し馱籠に使し兩個

月的玩鬼  
看悟空



公主白兔  
と變とて  
月宮へ  
去る



今本五箇言百七

の徒等們を宣ゆる八戒汝僧是を聞て官負寺と打列て急  
 ぎ殿中よまわつた色びの行者則ち八戒汝僧小有り夏どの仔細  
 語り你们兩個師父を保守て爰小在我亦去て妖怪を捉  
 へ来べしと忽ち勅手雲を放つて正南小飛行々斯て行者女  
 時分間小彼山上に飛到り雲を下つて尋ねる小妖怪が巢穴  
 更に知れ遠小喰字真言を念へて當方の土地神山神を喚  
 出我今一個の妖怪を追て這山小まわしぬと他が像と看  
 失い奈何尋せども跡跡を知れ你们其巢穴を知やと問け  
 ば二神合て曰く此山の七嶺山と号し山間小唯三箇の鬼穴  
 あるのを社古より曾て妖怪精を大聖今妖怪精と失ひぬひやを  
 彼鬼穴と打探ぬとて行者を引て山下小到り被下の両箇の

窟と看小許量の兎兒裡小在人音小驚きして四方小散り逃  
 去々二神亦行者を領て頂上の窟小到り果而彼妖怪這  
 裏小在行者が来るを看より乍ち短棍を取て跳つと出た小  
 四戸て曰く你の五百年前大りの小天宮を周せし海馬温うらや  
 自心生大胆小の皇宮小我親愛を破りたるぞ此恨世々忘  
 べ難我決て你を饒行者留て曰く你已小我手段を知バ  
 忘麼敢て敵もや快く一棒と類くと你が本相と現せと二箇  
 亦山頭小在て相争ひ鉄棒と短棍と互小術と闘くと日戦ひ  
 日走ると遂小空中小昇る處小忽ち碧漢の間より大陰日三君  
 現れぬい後邊小嫦娥と隨従未り大聖女時手と任めよと  
 嘯つと人行者是と聞て頭を返下急死棒と取て礼と儀

大陰曰く今你と對敵する妖精の我廣寒宮小て仙葉と攝  
玉兒のり他を捕ふる短棍の則ち其葉と攝處の持る他松小  
金鎖と聞きて宮を走つて出てて界小下りて既小一年と経る  
我今他を傷命の災あると知て特小来りて性命と救んとは  
万望の大聖老身の面小愛て他を命と饒り人行者曰く老  
大陰の尊言誰は是と詩客せざらんや然れども他天竺國王  
の公主と相云却て其像小愛り我師父と哄きて配偶り元陽  
と破んとすと其罪亦輕かり大陰の曰く你未だ仔細を知ら  
抑彼天竺國王の公主の凡人つらざる原嶮宮中の素娥あり一  
二十年前他曾て玉兒と奪て一珠と打らる其罪小依て遂小下  
界小下りて天竺國王の正宮皇后の腹と借て因て公主と生

るやと得らる遠玉兒も亦其時一拳と打らる仇と合口と前年  
松小宮を出素娥と捉て山中小弃て仇と報らる唯他が唐  
僧に配偶せんと傲り其罪実小饒り難り併らる你的師父未  
だ其害を受ざらむ唯一護小他と饒り人行者曰く既小這  
般の因果ありん我那ぞ異議候んや急ぎ他と收めぬ大陰  
自王君是と聞て大い小懼喜妖精小向ひて一喝しぬ他直  
小原身と現り一個の白玉兒と成りたり婦娥則ち素と取て  
他と養ふに住め大陰自王君行者小謝り遂小月宮小向ひて還  
りぬ入行者大陰と見送り頃て轉廻りて自王居小飛帰つて國王  
自ら三藏們小事の動静と仔細語つてつらつら個々撥馬さ日悟  
ひ口ハ管賞登りしつらつら行亦國王小對ひ真公主の布金寺

不在彼寺の老僧を養育し置る事を告げしに國王は満心  
 權喜明且急ぎ許すの内宮宮女們は命に若干の官負筆を  
 差添て布金寺へ使ひ彼老僧を遇て事の動静を具し説話  
 真ハム王と請得て遂に皇宮へ迎還しつゝ國王君臣二宮口  
 六院の白皇后妃嬪都て神僧の恩を思ひ感謝する爰際る  
 國王勸喜の餘りに堪じ俄に丹青匠を宣て師徒四個の像  
 を画し鎮花閣の裡に收て供養し大の進宴と安排し師  
 徒四衆と管待強て五六日を住め遂に金駕を備て二藏を座  
 へ君臣士民都て城外へ送ら出送り遠く送り来り口へ管に  
 餘浪と惜て別れを

油漬

東 牛 池 田 寺  
 京 池 田 寺 藏

繪本西遊記四卷之七終

